

# 石川達三における人間形成と文学的自我の醸成 —石川達三の思想と文学の背骨を育てた高粱—

定金 恒次

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2005年9月30日 受理)

## 1 はじめに

石川達三(1905, 7, 2~85, 1, 31・秋田県平鹿郡横手町生まれ)は岡山県、特に高粱とゆかりの深い作家である。達三はブラジル移民の過酷な運命を描いた「蒼氓」(昭10)で第1回芥川賞を受賞して文壇に登場、「日蔭の村」(昭12)、「生きてゐる兵隊」(昭13)、「風にそよぐ葦」(昭24~26)、「人間の壁」(昭和32~34)、「金環蝕」(昭40)などの話題作を発表。特に戦争の残虐さや社会の不正、不合理を追及し、「社会派」「戦う作家」として独自の境地を開拓した。また日本文学家協会理事長、A・A作家会議日本連絡協議会委員長、日本ペンクラブ会長など公的な役職も務め、文壇の発展に大きく貢献したが、岡山県ゆかりの作家であるということはあまり知られていない。

達三は大正元(1912)年9月から11年(1922)年3月までの10年間、岡山県上房郡高粱町(現高粱市)で過ごした。それは小学校1年(7歳)から旧制中学校3年(17歳)までの成長期であり、いわば最も多感な少・青年期である。この間の生活体験が彼の人格形成や世界観・人間観の確立、さらには文学的自我の形成・確立に大きく影響していることは疑うべくもない。本論文は、高粱における10年間の生活の様子を明らかにするとともに、その生活体験が彼の思想形成や文学の背骨形成にどのようにかかわっているかを考察しようとするものである。

## 2 秋田から東京、高粱へ

石川達三の父祐助(陸前南部藩の祐筆役石川儀平の三男、東京高等師範学校卒、英語教師)は、秋田県立横手中学校で教鞭をとったのち、同秋田中学校教頭を務めていた。ところが校長派と教頭派が抗争する校内騒動にまき込まれて(教頭派の敗北)、明治45(1912)年辞職。当時37、8歳であった祐助は同年6月ごろ一家をひき連れて上京、大井町に寓居して職を探す。したがって、秋田県築山小学校に入学したばかりの達三も大井町の小学校へ転校するが、同級生たちからは疎外され、担任教師からは無視されるという屈辱感を味わう。後年、達三は当時を回想して次のように述懐、悲憤の情を表している。

……6月7月の2か月間その学校に通ったが、たった一人の友達も出来なかったし、誰かと話をした記憶も残っていない。話をしようにもまくしたてるような東京言葉が私には

恐ろしかった。(中略) 彼らはエゴイストであり排他的だった。何かしら一種の優越感をもっていて、田舎の子供を眼中に置かなかった。校庭でたったひとり置き去りにされていた時の孤独感を、私はいまだに忘れることができない。それは一種の怒りでもあった。群衆の中の孤独。しかも同じ年頃の子供たちの群がる中における孤独だった。私は毎日重い足取りで登校し、奥歯を噛むような思いで帰宅した<sup>1)</sup>。

やがて8月末、父は達三たちに、「今度お前たちがゆく所は、山にかこまれた町で、きれいな川が流れていて、大変良い所だ。」と告げる。岡山県立高梁中学校(現高梁高等学校)英語主任教師として迎えられることになったのである。かくして達三たち一家9人(父祐助、母うん、長男晋、次男悌次郎、三男達三、四男勝四郎、長女妙子、五男伍平、六男忠)は、岡山県上房郡高梁町(現高梁市)へ赴くのである。大正元(1912)年9月、達三7歳の時のことである。

### 3 高梁の町

高梁町は備中松山藩5万石、京都所司代や幕府の筆頭老中などを務めた板倉一族の居城のあった地である。臥牛山麓、高梁川の清流に沿って開けた閑静な城下町、文字どおり山紫水明、風光明媚な地で、当時人口は6千人であった。達三の目に映る高梁の風物は自然が豊かで、「川にも山にも遊び場が無数にあって、私たちは退屈しなかった。二筋の細い谷川が山から落ちてきてこの町を流れて居り、その岸をざるで掬えば小鮒やぎぎと一緒に、赤い腹をした蝶鰻がはいって来た<sup>2)</sup>。」そしてこの町には「県立中学校と女学校とがあり、キリスト教の教会があり、金光教の教会があり、大きな古い寺がならび、古い神社が三つ<sup>3)</sup>」もあるほど、文化の香りが高かったのである。父が英語教師として勤める県立中学校は松山城の本丸跡にあり、天守閣のある城山の麓の高い石垣の上に建てられていた。眼下に高梁川の清流と町の家並みが一望でき、授業時間の始めと終わりを告げる鐘の音が町のほとんど全域に聞こえるので、これが町の時報の役目を果たしていたという。達三はこうした高梁の町で中学校3年を終えるまでの10年を過ごすのである。

高梁へ着いた翌々日、達三は父に連れられて高梁小学校1年への編入手続きに行く。担任の野口先生は達三を渡辺という少年の横の席に座らせ、「渡辺、お前の家はこの子の隣だろう。解らないこと、いろいろ教えてやれ。」と命ずる。渡辺少年は「はい。」と歯切れのよい返事をして、各教科の進度や学校生活のこまごましたことを教えるだけでなく、遊ぶ時も登下校時も絶えず付き添って忠実に達三を世話する。東京大井町の小学校での悲しい体験から、高梁の小学校へ転校することに一種の恐怖を感じていた達三は、この渡辺少年の親切さに心から感謝するのであった。

こうした教師や級友の親切な対応に、達三は3か月前東京で受けた冷酷な仕打ちに改めて強い怒りを感じるとともに、非情な人間に育った東京の人々の人間形成の過程に深い疑念を抱くのであった。そして東京で体験したような屈辱感や孤独感にさいなまれることな

く、のびのびと未知の地高梁での生活に溶け込むことができたのである。それはまた、彼にとって「人間信頼」という貴重な財産となったばかりでなく、彼の豊かな心の形成に資すること大であったことは容易に推測できるところである。

しかし、達三は言葉の違いに悩まされる。「私は秋田言葉であり、彼らは岡山弁だった。岡山弁は馴れない私の耳に、何かだらしく、間伸びのした、下品な言葉に聞こえた。母は町へ買い物に出て、私よりももっと困ったに違いなかった。しかし私たち兄弟は、1か月もたつと大抵の岡山弁は覚えてしまって、不自由はしなくなった。そして私もまた渡辺たちと一緒に、だらしく間伸びした、下品な言葉を使うようになった<sup>4)</sup>。」と同時に、達三は「日本の広さ」を知り、秋田、東京、岡山の三つを比較することによって、「みずからの小さな世界観」を作り上げていく。そして人情、風俗、言語の相違を知り、人間の生活というものがどんな風にでもありうるものであることを知って、自らを新しい環境に調和させ、適合させようと懸命に努力した。こうした努力こそ、新しい自分の世界を作ろうとする働きであり、そのことが自らの心を鍛え、強靱にしたのである。

当時高梁の町には武家屋敷や武士の残党など、封建時代の名残が多分に存在していた。達三はそうしたものに心を強くひかれるとともに、それらに触れることによって武士のあり方や武士階級の生活実態を感じとったのである。

（町には）門長屋のついた古い構えの家が至るところにあった。その門の奥はしんかんとした中庭があり、その向こうに広い式台のついた本玄関と内玄関とが並んでいた。住む人があるのか無いのか解らないほど閑寂な姿をしていた。「武士」といわれた人たちは、こういう家の中で物静かに暮らしていたに違いなかった。それは一種のものしく、威厳があった。私たちが住んでいた家は借家であったが、その家の奥座敷には長押の上に2本の槍が懸けたままになっていた。私は兄たちと一緒に、その槍を取りおろし、鞘をはらって見たことがあった。一尺ばかりの鋭い穂先がなかば錆びていて、何かしら古い時代の男たちのすさまじい生き方を偲ばせるものがあった<sup>5)</sup>。

このように達三は「古い男たちのすさまじい生き方」に思いを寄せたわけであるが、実はそうした人物が現実生きていたのである。松山藩の生き残りで武家屋敷に住む桑野さんという70過ぎの老人である。白い顎鬚を垂らし、少し腰が曲がっていて、弓の折れを杖にして町を散歩していたが、町の人たちはみんなこの老人を尊敬していたという。桑野さんの老いの皺をたたんだ姿は、達三の目にも「何かしら清潔で凜乎として」映り、「時は移り、町は変わり、時代は大正の御代であったが、この人だけは今も松山藩の武士の美しく清冽な姿を残していた<sup>6)</sup>」のである。桑野老人は高梁中学校の剣道の先生をしていた。中学校の道場で生徒たちに稽古をつけている姿を見た達三は、桑野老人の気魄と技量の卓抜ぶりに瞠目、限らない畏敬の念を抱くのであった。

また、高梁中学校の裏山の頂上には松山城の城跡があり、ここに小舎を建てて住んでいる老人夫婦がいた。これもまた松山藩の生き残りの老夫婦であった。何を生業にしていた

かはさだかではないが、この老夫婦にも達三は日本の歴史のもつある種の「香気」を感じたという。要するに、高梁の町に残存する封建時代の遺品や遺跡・遺物に接して、達三は徳川時代を肌を感じ、古きよき時代の先祖の面影を看取する。特に武家屋敷からは堂々とした威厳を感じ、長押の檜からは益荒男らしい決意を感じとったのである。そしてまた松山藩生き残りの老人たちには強い畏敬の念を抱いたのである。こうした封建武士の生きざまや封建時代そのものへの共感と郷愁とを、高梁の町で初めて体験した達三は、高梁の町に限りない愛着を感じたのである。

#### 4 先生の子

後年の達三の述懐によれば、当時高梁の町では、「最高の名誉を与えられているのが県立中学校の校長であり、その次が私立女学校の校長と小学校の校長であった。それから町長と警察署長と郵便局長であった。中学校の先生たちは町では最高の知識階級であり、信望の最も厚い人たちであった<sup>7)</sup>」のである。そして中学校教師の子弟は常に「先生の子」と呼ばれ、そうした呼称には、一つにはその家系に対する尊敬の意味と、いま一つその尊敬に値するだけの行動を要求されるという自覚と義務と責任付与があった。したがって、達三が学校で良い成績を取ったときには「さすがは先生の子だ」と称賛され、逆に友達と喧嘩をすれば「先生の子が喧嘩をしている」といって非難されたという。こうして達三は高梁の町を去るまでの10年間、尊敬されると同時に自覚を求められ、義務と責任を負わされたいわば道徳的制約と、一種の倫理的規範に根ざした行動とを余儀なくされたのである。

こうしたことが、達三の人生観や性格形成、さらには作家としての生き方や思想形成に大きく影響したことは明かである。例えば達三は後年、裁判（刑事被告人）や総選挙（立候補・落選）などを体験する事態に直面することになるが、そうした際の関係者の不合理、無責任かつ非倫理的な言動に対して痛烈な批判を浴びせていること、あるいは社会悪を摘発する彼の作品が反社会的ではなく、終止責任倫理的であることなどはその証左といえる。

#### 5 級長をめぐる

達三の回想によれば、「私は（高梁小学校の）2年から卒業のときまで、学年成績はいつも1番であった。級長にしてもらえなくて、ずっと副級長であった。級長は柳井という2番か3番かの子であったが、柳井の父はこの町の県立中学校の校長であった。校長の息子を級長にしたのは、受持の教師のはからいか、又は小学校校長の配慮であったに違いない。私はその事に不満だった。他のクラスではみな、1番の子が級長になって、肩から白い編み紐をかけていた。私だけが1番であったのに緑色の副級長の紐しか貰えなかった。家で、母がこの事の不当性を口にしたことがあったが父は何も言わなかった。クラスの生徒たちはみな私が1番であることを知っていたが、柳井が級長になることを黙認していた<sup>8)</sup>」のである。達三は、「このように先生自らが不当なことをまるで「長いものには巻

かれろ」の諺のように率先して実行し、不正行為を現実には教えているようなものと憤慨。そして押さえがたい不満と忿懣を5年の間ひたすら押さえ、耐え続けていた。それは達三にとって「社会の不正」と如実に直面した最初の経験でもあり、不正に対する憤りの情は内攻して正しい処置を要求する正義感を培う大きな素因となったのである。後年、達三が時事的社会問題に着目し、常に民衆の立場に立ちながら社会悪を指弾するような作品を書くようになったのは、実はこうして培われた正義感のなせるわざといつてよいであろう。

達三は戦前、戦中、戦後を通して、「社会派」「戦う作家」として時代や権力に迎合せず、社会の不正や不合理を摘発するような作品を数多く書いた。そして自らも小説の目的は「社会正義」の発露にあるとさえ道破しているのである。——「小説の主題は、耳目に触れる社会の中から自然に湧き出てくる。不正、不合理、歪み、まちがい、不当な権力や不当な富、不当な要求や不当な圧迫。そういうものが眼につき、頭の中に淀んで、黙っていらなくなる。すると芸術のためではなく、誰かに訴えたい意欲、読者に共感を求めたい意欲が高まってきて、それを小説の形にしようとする<sup>9)</sup>。」「私は40年以上も作品を書いて来たが、そのうち主要なものについては、何の為に書くか、何を目的に書くか、ということがはっきりしていた。目的が明確になってからでないと書き進めることができない。従ってそれらは社会の不正、不合理などを摘発するようなものが多かった。作品を書くことは私の闘いであった。いわば作品は闘いの手段であった。(中略) 眼の前にある社会の、不正や危機や誤謬を、そのまま放ったらかして居て、文学だけをどんなに飾ってみたところで、そんな文学はひま潰しに読むだけでいいだろうという気がする。(中略) 自分としては一つ一つが時代への警告であり世相との闘いであった<sup>10)</sup>。」ちなみにそうした視点で書かれた代表作を例示してみる。

**蒼氓** (昭10) ブラジル移民の過酷な運命と悲惨な生活を克明に描き、それは「日本の政治と日本の経済とのあらゆる手落ち」に起因しているとして、国策の失敗を告発しようとしている。第1回芥川賞受賞作品となり、菊池寛(選考委員)らはこの作品をもって、プロレタリア文学とは異なる「社会派文学」の誕生を認めるという画期的作品。

**日蔭の村** (昭12) 東京府小河内村の貯水池築造問題を取り上げ、犠牲になっていく村民たちの悲惨な現実を描く。厳しい自然条件にあえぐ日蔭の村が、発展していく都会の犠牲となって滅びゆく姿を、作者は村民の怒りを代弁しながら、社会機構の不条理と大資本の冷酷さを指弾しようとしている。

**生きてゐる兵隊** (昭13) 中央公論者特派員として南京に赴き、現地での見聞をもとに戦争の悲惨さや日本兵の残虐行為などを赤裸々に描く。戦争の痛ましさと戦争報道への批判がこめられている。新聞紙法に抵触、起訴されて禁錮4か月執行猶予3年の判決を受く。

**転落の詩集** (昭14) 男に捨てられ、その男に対する怨恨と子どもを抱えての絶望感からスリを働く女性と、その取り調べに当たった警察官との愛情を描く。時代と社会の波にもまれながら生きていく人たちへの真摯な人間批判と正義感が作品の底に流れている。



**風にそよぐ葦**（昭24～26） 昭和16（1941）年9月の第3次近衛内閣崩壊直前から昭和22（1947）年5月の新憲法発布に至るまでの激動的な暗黒時代が主題としてとらえられている。改造社などの営業方針が戦時下国民の思想上許しがたいとの理由から解散命令が出されるいわゆる「泊事件」から、神奈川県特高警察による関連人物の検挙、拷問、自白強要を迫る「横浜事件」に至る全貌を明らかにしている。軍部の言論弾圧への強い抗議と自由への切なる希求に満ちた作品。

**人間の壁**（昭32～34） 昭和32（1957）年、佐賀県教職員組合が教職員定数削減反対闘争を行ったことを中心に書いた作品。1学級の定員が過剰であることを認めながらも教員のリストラを強行する政府や地方行政に、現場教師や母親たちが抗議する姿を描いて日本教育界の歪みを指摘するとともに、教師の経済的、精神的安定なくしては真の教育はなされないと訴える。

**金環蝕**（昭41） 九頭竜川ダムをめぐる汚職事件がモデル。昭和39（1964）年7月の政府与党の総裁選挙にからむ事件を思わせる。権力の中枢にある総理派が汚職事件を犯しながら罪を暴かれることなく、業界新聞記者や下級秘書官らが不可欠な死に追いやられたり、真実を追求するはずの国会議員が金を与えられ海外に行かされて質疑不能の事態に陥ったりする。「まわりは金色の栄光に輝いて見えるが、中のほうは真黒に腐っている」という腐敗した政界への怒りをこめた小説である。

そのほか、転落していく農村の娘の半生を描いた「心猿」（昭11～12）には、昭和10年代の日本の世相や社会情勢に対する達三の深い憂慮の情、司法修習生の犯罪を扱った「青春の蹉跎」（昭和43）には道德性の崩壊の世相に対する憂慮の念が奔出している。また、「幸福の限界」（昭22）、「望みなきに非ず」（昭22）、「泥にまみれて」などの底には、誠実な人間批評と無責任な社会への抗議の念がこめられている。

このように、達三は正義感に誘発された作品を数多く書いただけでなく、自らの行動としても不正を憎み正義を実践した。例えば、昭和17（1942）年1月、海軍報道班員として東南アジア各地をまわった時のことである。2月20日シンガポールに入ると、ある華僑から日本兵の略奪的行為を非難され、達三は深い憤りを覚えて謝罪し、自らのポケットマネーをはたいて支払ったという<sup>11)</sup>。

## 6 達三の母

達三の母うんは高梁へ来て出産した女兒（大正3年2月）を含め8人の子どもの養育と家事一切を一身に引き受け、早朝から夜更けまで息つく暇なく働き通した。——「母は夜になるとランプの下で遅くなるまで縫い物をしていた。縫い物は年じゅう溜まっていたが、季節が来れば母は必ず私たちに、その季節の着物を取り出して着せてくれた。ある日、母が子供たちを呼び集める。そして大きなつづらの中からみんなの着物を取り出して、一斉に衣替えをさせる。着物も羽織も下着も、全部そろっていた。子供たちが脱ぎ捨てたも

のは、次の季節までにまた洗い張りして、新しく縫い上げてくれるのだった。それは一条乱れぬ見事さであった。母は私たちの足袋までも自分で縫って作った。足袋底の厚いきれに型紙を当てて、裁ち鋏で切り取り、ひと針ひと針、たんねんに縫った。親指の爪先が破れると、その親指の部分だけを切って新しいきれを当ててくれた<sup>12)</sup>。」のである。

父祐助は家事には無頓着、子どもたちはみんな幼くて家事の手伝いのできるものは一人もいなかった。母は炊事も掃除も洗濯も縫いものもすべて一人でやってのけた。こうして一日じゅう夜叉のように働き続けている母の姿に、達三は抵抗しがたい迫力と偉大な力を感じたという。それに、針仕事などをしながら綺麗な声で軍歌などを口ずさむ豊かな心。皇太后陛下崩御の際に涙して悲しむほど皇室を敬愛する気高い心。達三たち兄弟が銭湯へ行く途中お金を紛失して途方に暮れたとき、慈愛に満ちた対応をしてくれた寛大な心。——このような母の生きざまや心根に、限らない思慕の情を寄せているのである。

そして、何よりも子どもたちをこよなく労った母の愛情の深さを、後年達三は感謝の念をこめて次のようにつづっている。——「……それからまた吹き降りの雨のなかを、兄たちと傘をかたむけて家に帰った。足は雨と泥にまみれて、凍るほど冷たかった。それが泣きたくなるほど辛かった。帰って見ると、父も弟たちもみんな寝ていて、家の中は暗かった。私はまた、こんなに遅く帰ったことで母に叱られはすまいかと恐れていた。足音を忍ぶようにして広い土間に入って行くと、奥から母の声が聞こえて来た。釜にお湯が沸かしてあるから、足を洗って上がれ……と言った。大釜に一ぱいの湯が沸かしてあった。母は遅くなってからわざわざ薪木を燃やして湯を沸かしておいてくれたのだった。私たちは大きなたらいに湯を取って、冷え切った足をひたした。すると、今まで止まっていた血行が蘇って、新しい血が足先に流れていくような気がした。湯のあたたかみが全身に伝わり、快く痺れるようだった。私はそれを、母の有難さが身に沁みて来るのだと思った<sup>13)</sup>。」

このように母うんが子どもたちに傾けた熱い愛情、そしてその発露たる献身的な生きざまが、達三たち8人の子どもの精神に大きな感化を与えたことは疑う余地のないところである。また、こうした母の人間像こそ、達三にとっての「永遠の母親像」であると考えられる。後年、彼は長編「幸福の限界」を執筆（昭和22年中京新聞ほか連載、翌年単行本）するが、作中に登場する「明子」なる人物は、彼の母の姿が原型となっており、「理想の母親像」として美しく描かれている。

## 7 母の死

高梁の町に落ち着いて2年3ヶ月（大正3年12月）、達三は「母の死」という一大痛恨事に遭遇する。この地で出産した乳飲子を初め8人の子どもの養育と家事に忙殺され、身体的、精神的過労から脳溢血で倒れたのである。母37歳、達三9歳（高梁小学校3年生）であった。母の死の直後、町内各界各層の人々から心のこもった慰めの言葉をかけられるにつけ、達三は自らの立場と悲しみの深さを改めて痛感する。あるいは先生や級友たちが

そぶりで見せてくれるいたわりの情に、この町の人々の心の温かさを肌で感じるのであった。さらには門前で交わされる近所の夫人たちの母に関する称賛的なうわさ話——家の戸棚にはいつも雑巾が15～16枚も縫って重ねてあったこと、行李の中には8人の子どものたちの着物が夏と冬とに分けて整理され、来年の浴衣でさえも今すぐ着られるように揃えてあったこと、女中も使わないであの大家族を抱えて行き届いた世話をしたこと、長男も次男も三男もみな優等になるほどよく勉強させたこと——などを聞くにつけ、母の偉大さを誇りに思うと同時に母を失った悔しさを実感するのであった。

やがて通夜から納棺、火葬、納骨、葬儀に至る一連の儀式を通して人生の悲哀を味わい、母との縁を断ち切られてしまうことの残酷さと絶望感とを生々しく体験する。

8人の子どもの養育に窮した父は、三男達三を国民新聞の記者をしている叔父(六郎)に、四男の勝四郎を軍人の叔父(連平)に引き取ってもらい、末娘嘉志子を養女に出す。

## 8 父の再婚

妻を失って子どもの養育に困り果てた父祐助は、後妻を迎えることによって窮地を脱出しようとした。後妻は高梁の町の私立女学校の国語教師で、キリスト教徒であった。名をせいといい、30歳ぐらいであったという。初婚で、7人の「まま子」の家庭に入ることにして周囲には反対の声もあったが、当人は「あの残された大勢の可哀相な子どもたちを一人前に育てあげることが出来たら、私の生涯の仕事として充分だと思う。」という使命感に燃えて決意したのであった。したがって、東京の叔父宅に預けられている達三もなるべく早く引き取ってほしいと、彼女が父に切望したという。しかも、前もって達三に手紙や書物(少年読物)などを送って、よき母となるべく態勢を整えていたのである。

大正4年8月初め、達三は上京した父に連れられて高梁へ帰る。湛井駅<sup>14)</sup>から2台の人力車で川沿いの6里の道を通り、町はずれの橋のたもとまで帰ると2人の兄が出迎えてくれる。それを見て達三は、やっと自分が帰るべき所に帰ったという魂の安らぎを覚える。

しかし、家にたどり着いても新しい母に引き合わせてくれない父の無神経さ(家庭人としての無能ぶり)に、達三は不満を募らせる。奥のほうから出て来た新しい母とごちない初対面の言葉を交わし、実母との立場の相違を比較して同情的な気持ちもわいてくる。

ところが意外なことに、「この家の中に1人の老女が居り、私より四つ年下の見知らぬ小娘が居た。老女は継母の母であり、小娘は母の姉の子だった。母は以前、この老母と姉の子と3人で暮らしていたが、母が私たちの家に迎えられるとき、この老母と娘とを置き去りにするわけには行かず、3人が全部私の家にはいつて来た<sup>15)</sup>。」のであった。

継母は7人の継子の養育に誠心努力した。そうした懸命な努力を傾注することによって後妻としての自らの責任を果たし、自らの位置を維持しようとしていることが達三にはよく分かるのであった。達三たち兄弟もまた役割を分割して、掃除、水汲み、鶏・兎・モルモット・山羊の飼育など、家事の手伝いをして継母を助けた。



やがて継母は1女を出産、乳児を乳母車に乗せて女学校へ出勤。小使室に預けて授業の合間に育児する姿を見て、達三は「教師」としての尊厳が失われるようで味気ない気持ちを抱くのであった。しかし継母はなかなかよくできた人であった。毎月7日には精進料理を作って、「今日はお前達のお母さんの御命日だよ。手を洗って仏壇を拝みなさい。」と言い、亡母の位牌の前に灯明を捧げるのであった。

継母もまた多産家で、失継ぎ早に4児（2男2女）を出産、家族は10余人の大世帯になって、一家は「家庭」というよりも「合宿」の様相を呈したという。こうしたなかで、達三たち兄弟は強い独力心と自主性を養い、同時に協調性と強靱な精神力、さらには一種のエゴイズムをも育てる。継母もまた家事と子どもの養育に苦闘する。特に継子と実子をいかに公平に扱うかに腐心する。

この家族には、さらに継母の姉なる人（達三にとっては義理の伯母）が来て同居するようになる。神戸で産婆をしていたが良人に死別、病を得て働けなくなったからである。この伯母は産婆に必要な道具類、薬品、書籍などを持参していた。達三は伯母の留守の間に「産婆学大全」（上下2巻）なる本を盗み読みする。「私は猥褻を感じるよりもむしろ一種の尊敬を感じていた。女性性器の精巧な挿絵が1頁に一杯になるほどの大きさに掲げられて居り、それに各部の名称が記されているのを、息を詰めて眺めながら、私は怪奇小説をよむよりもっと怪奇なものに感じ、しかもここに、人間社会の眼に見えるすべての現実よりももっと奥深いところにある現実を考えていた。私はこの時になって始めて、感情的あるいは感覚的にではなく、医学的または生理的に、「女性」という存在と、その存在の意義とを理解した。けれどもそのような理解はまだ直接に私の欲望と結びつくものでなくて、私の秘密な知識として蓄積されただけのことだった<sup>16)</sup>。」しかし反面、こうした生々しい知識を得たことによって未知なるものに対する魅力を失い、西洋の詩人達のように、手放しで女性を賛美する純真な気持ちをも喪失してしまうのである。

## 9 キリスト教への接近

このころ、キリスト教徒であった継母に勧められて、達三たちは町の教会の日曜学校に通った。そして教会に親しみ、キリスト教に関する多くの知識を得た。また大人たちの祈りや告白や合唱を聞くが、何か自分とは異質なものを感じ、必ずしも共鳴はしなかった。しかし教会が催すイベントなどには友人たちと積極的に参加、クリスマスの夜に行われる聖劇では主役を演ずるなど、中心的人物として活動する。

のち中学校3年のころ、ある心の渇き——「何か人生のより深い真実を知りたいというような気持ち」を感じ、もし神を信じ信仰に入ることができたらそうしたいという純粋な思いを抱いて、教会へしばしば足を運ぶようになる。聖書を耽読したり、神戸の教会から訪れる著名な牧師の伝道講演に耳を傾けたりする。あるとき感動のあまり、すぐに洗礼を受ける人たちの列に進み入ろうかという衝動にもかられるが、「自分は本当に神を信じ得

るだろうか」という一抹の不安がもたげ、軽率な行動はとらなかったという。その夜、寢床に入って牧師の演説を咀嚼しながら真剣に考えた結果、次のような結論を出すのであった。——「私は幾つもの疑問を発見し、牧師の演説の中の怪しげな論理に気がつき、その誇張された表現と誇張された結論に反撥を感じ、要するに教会や牧師たちの通俗さに嫌気がさして来て、あくる朝になると、洗礼を受けなかった自分に安心した。(中略) 結局私はキリスト教を知識として受け入れただけであって、宗教として受け容れることは出来なかった。私は信仰とは縁の遠い人間であった<sup>17)</sup>。」——

達三は大正15(1926)年の夏、処女小説「寂しかったイエスの死」を山陽新報(現山陽新聞)に連載(11回)するが、この作品はこうして得たキリスト教についての知識に根ざすものといえよう。

## 10 中学校受験の蹉跌

大正7(1918)年3月、達三は東京の叔父(六郎)の勧めで府立第一中学校(現都立日比谷高校)を受験する。子どものなかった叔父は、達三をしてエリートコースを歩ましめ、わが養子として迎え入れたいという下心があったという。高梁小学校で2年から6年まで首席で通した達三は受験には自信があったが、ナンセンスな奇問に失望して答案を書く意欲を喪失、当然のことながら不合格となる。途端に叔父は冷淡になる。そればかりか、東京滞在中の達三の行動を非難、無実の罪をきせて高梁へ送り返す。達三は失意と屈辱感を抱いて帰宅するが、すでに高梁中学への入試は終わっており、小学校高等科に進まざるを得ないという口惜しさと絶望感にうちめされる。そして、「私はこの時になって始めて、叔父が余計なことをしてくれたと思った。何事もなければ私は無事に小学校を卒え、無事にその町の中学校に入っていた筈だった。まるで罌を仕掛けるようにして私に落第の屈辱を体験させ、中学校進学道をふさいでしまったのは、叔父の無責任な思いつきに他ならなかった<sup>18)</sup>。」と悔しさに涙を流すのであった。

## 11 高梁中学校進学

結局、達三は1年遅れて父が勤める県立高梁中学校に進学する。この学校は明治28(1895)年、岡山県で3番目に創立された名門中学校であるが、小学校での同級生はすでに2年生になっており、やりきれない屈辱感を味わう。勉学にも熱意を失い、何かにつけて投げやりになっていく。

大正10(1921)年3月、父は高梁中学校教頭職を辞して、岡山市郊外にある関西中学校(現関西高校)に就職する。県立中学校奉職による恩給受給資格を得た父は、私立中学勤務による収入を加えることにより、家庭経済を立て直そうとしたのである。

一家が岡山市郊外の大安寺に移ってからも、達三だけは高梁に残留して中学校3年に進級する。町内の菊村家(商家・醤油醸造業)に下宿、孤独に耐える一方、解放感をも味わ

いながらさまざまな人生体験をも積み、新しい世界をきり開いていくのであった。

菊村家は質屋も営んでいた。したがって、質草を持って訪れる町の人々の哀しみを感じ、質草一つ一つに込められた入質者の歎きを感じた。あるいはまた、質流れ品競売会での商人たちの醜い姿に触れ、人生の隠れた一面を知るのであった。そのほか、菊村家に入出入りする数多くの職人や商人たちの生きざまに接し人間生活の真実の姿を見開いて、社会的視野を広げるとともに人間的にも成長していく。醤油倉へ遊びに行き杜氏たちの話を聞いたり働き方を見たりするうち、醤油の醸造方法もすっかり覚えてしまう。

菊村家の書棚から持ち出して読んだトルストイの「復活」や賀川豊彦の「死線を越えて」などは、達三に読書の醍醐味を味わわせてくれる。「復活」ではネフリュードフがカチューシャを抱いて、中庭を横切り自室に連れ込むとき、庭は春の夜の霧に閉ざされていて、沼の氷の割れる音がぴんぴんと聞こえてくる、という情景描写が特に印象的で、こうした点が達三をして文学に開眼せしめる一大契機になったという。「死線を越えて」は、達三が社会主義的な思想や行動に触れた最初であって、「ひとりのキリスト教徒が、その信仰によって貧民窟に身を投じ、あらゆる苦難を越えて貧民の救済に当たろうとする、闘いの文学であり信仰の文学であった<sup>19)</sup>」という。この本によって、達三は一種のヒューマニズムの実相に触れる思いがし、主人公の気高い犠牲と努力の生き方に感銘するのであった。

#### 注及び引用文献・参考文献

- 1) 石川達三「私ひとりの私」 61頁
- 2) 同 65頁
- 3) 同 65頁
- 4) 同 66-67頁
- 5) 同 69頁
- 6) 同 69頁
- 7) 同 71頁
- 8) 同 74頁
- 9) 石川達三「経験的小説論」353頁（新潮社『石川達三作品集25』所収 1974 所収）
- 10) 石川達三「自己の文学を語る」6-7頁（至文堂『国文学解釈と鑑賞』529号 1976所収）
- 11) 文芸春秋『現代日本文学館38 石川達三』附録 1966
- 12) 石川達三「私ひとりの私」 67頁
- 13) 同 73頁
- 14) 当時の吉備線の終点、伯備線が豪渓まで開通したとき廃止された。
- 15) 石川達三「私ひとりの私」 101頁
- 16) 同 123頁
- 17) 同 137頁
- 18) 同 117頁
- 19) 同 131頁

「私ひとりの私」は文芸春秋『現代日本文学館38 石川達三』1966 所収

The Formation of Character and Literary Self in  
Tatsuzo Ishikawa  
–Takahashi Town which Fostered Ishikawa’s  
Thought and Literary Background–

Tsuneji SADAKANE

*Courses in Japanese Studies for Students from Overseas*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 2005)

A novelist Tatsuzo Ishikawa, who was awarded the first Akutagawa Prize, had lived in Takahashi Town (now Takahashi City), Okayama Prefecture for 10 years from 1912 to 1922. It was during his growing period from the first year of elementary school (7 years old) to the third year of junior high school (17 years old), which was also the most sensitive period of boyhood and adolescence. It is out of doubt that his living experience in this period affected the formation of his personality and literature greatly.

The purpose of this study is to clarify his 10 years of life in Takahashi and to consider how his living experience there concerned the formation of his thought and the background of his literature.